

附属図書館利用についての二股膏藥的解説

文学部研修員 野 口 隆

最初に質問を出す。京都大学附属図書館に関する次のAからEの記述のうち、正しいものは一つしかない。それはいずれか。

- A. 目録に登録されているのに2階の書架に見当たらない本は全て貸出中である。
- B. 或る図書が2階の書架にあるか地下書庫にあるかは職員に尋ねなければ判らない。
- C. いわゆる新分類の図書は全て2階の書架にある。
- D. オンライン目録の機械操作が苦手な人はカード目録を引けばそれで事は足りる。
- E. オンライン目録で検索して見つからない図書は附属図書館に所蔵されていない。

このうち四つは間違いなのだが、しかしそれらは利用者に十分知られてはいないように見受けられるので、またこの拙文が人目に触れるのは丁度新学期ごろということでもあるので、附属図書館の利用のしかた特にそのわかりにくい点のいくつかについて、僭越ながらここで初歩的な解説をしようと思う。右のそれぞれの当否を既に正確に把握しておられる向きは適当に読みとばしていただきたい。質問の正解は以下の文中で順次明らかにしてゆく。

ところで僭越なわたしは何者かというと、文学部の学生院生等として長く本館を利用してきた一方で、この八年ほどはアルバイトで夜間や週末の図書出納業務にも携わってきた図書館職員のはしくれである。そのためこの文章には、はしくれ職員として不慣れな利用者に対し懇切丁寧に説明するという立場と、一利用者として現状の改善すべき点を「おかみ」に訴えるという立場とが入り混じる。「二股膏藥的解説」と題する所以である。

1 地下にひそむ図書

図書館を使い慣れた利用者にとっては当たり前というもおろかなことなのだが、地下にも本がある、ということを知らない利用者は少なくない。まずはそのことを強調しておきたい。

目録によればこれこれの記号で、しかじかの図書があるはずなのだが2階の書架にない、もしや貸出中ではあるまいか、という問い合わせをカウンターでしばしば受ける。試験やレポートや語学の講読にからむ図書ならばそのとおり貸出中である可能性が大なのだが、むしろ一般的にはそれは、地下書庫に排架されているため2階で見当たらないだけであることが多い。つまり最初の質問のAは間違いである。無論地下の図書も、多少手続きは面倒だけれど、2階の開架図書と同じように読んだり借りたりすることができる。

本来ならば目録を見るだけでその図書が2階にあるのか地下にあるのか、判るようになっていくことが望ましい。しかし現在カード目録はそうっておらず、登録されている本が2階の書架にない場合とりあえずカウンターの職員に問い合わせることが必要である。質問の正解はBである。すべての利用者がその問い合わせを励行しだせばやがて、カウンターでは対応しきれなくなって目録に開架閉架の別を示すためのプロジェクトが動き出す日があるいは来るかもしれない。それは例えば、「書庫」などという判子を作ってそれを特定のカードにひたすら押しつけてゆくという単純な作業によって達成できることなのである。なおオンラインの目録は既に開架閉架の別をすべて明記しており、さすがにこの点ではカード目録よりも進化していると評することができる。

どのような性質の図書が地下に送られるのかという、まず第一に古い本。その中には、古いゆえに貴重なものもあれば日進月歩の学界で今では価値がゼロに近いものもある。地下書庫は保存倉庫の役割と書物の墓場を兼ねている。次に占有スペースが利用頻度に見合っていない全集叢書類。本居宣長全集・西田幾多郎全集・伊藤整全集・明治百年史叢書などはかつて開架の第一線に配置されていたが、時の流れとともに地下に沈んだ。古くはないのに地下に排架されるのは、専門性が高く利用が一部の研究者に限られる文献であろう。そのかわり地下の図書は、院生や教職員の場合開架に比べて貸出期間が長いので、これを要するに狭く深く利用されるものは地下に行き、逆に広く浅く利用されるものは開架に出る、ということになる。

ここで疑問に思うことがある。最初の質問のCも間違いで、いわゆる新分類の新しい図書でも一部は地下書庫に回されるのであるがその中に、どう見ても開架に置いた方がよさそうなのものが数多く混じっているようにわたしには感じられるのである。狭く深くというのはこちらが勝手に考えたことで開架閉架の安排に特に明文化された基準はない由だが、しかし地下書庫に入庫検索できるのは院生以上と限られているのだから、素人向けの概説書などがそこに置かれると誰にも振り向いてもらえないのではあるまいか。以前からそう思っていたのでこの機会に上司に尋ねてみたら、申し出があれば検討した上で配置の不適切なものは変更するのだそうである。そこで早速自分に判る範囲で気づいたことは具申した。もし今後『索引本佩文韻府』や『新編国歌大観』を地上で見かけることがあれば、それはこの具申が通った結果である。利用者各位におかれても同様の御意見があれば是非御申し出を願いたいとのことである。

なお地下書庫の利用者への最大のお願いは、本の順序を乱さないこと。樹海のような電動の集密書庫で一旦図書が行方不明になると、その探索作業は困難をきわめ救出まで何年もかかる

ことさえある。その間その図書は一切利用できず図書館にとって大きな打撃となるので、くれぐれも地下書庫の図書はお間違えのないよう、正しい位置にお戻しいただきたい。

2 目録三者三様

図書を探すのに目録は不可欠だ。ことに附属図書館は書架が方々に分裂しているので、或る文献がどこに存在するか、そもそもその文献がどこにあるのかわからないのか、それは目録を引かなければ判らない。だが悲劇的なことにこの図書館では書架も分裂しているが目録も分裂しており、和書の書名目録に限っても（その1）かなり古い本か、（その2）それほど古くはないが新しくもない本か、（その3）ごく新しい本か、によって引くべき目録もその引き方も全く違う。およそ情報というものを最も効率的に検索できるのはその一元化された状態においてであろうが、わが附属図書館の目録はその対極にあると言わねばならない。

三分裂している目録のうち最も扱いやすいのは「その2」で、これは単なるアイウエオ順である。「その1」はこれと微妙に異なり、大筋はアイウエオ順だけれどもその細部はいわゆる電話帳方式、つまり「高橋」や「武田」より前に「田島」「田中」「田村」が来るというように、まず書名を頭漢字別にまとめてある。但し頻度の低い漢字はまとめず単なるアイウエオ順に流す場合もあれば頭漢字のみならず2字以上の熟語別にまとめた場合もあって、配列順序に一貫性が乏しく慣れた人でもこれを引き損なうことが珍しくない。したがって、そこに目指す図書のカードが見つからないからといってすぐに諦めるのは早計で、前後のカードを繰り上下左右を確かめ、それで駄目でもなお図書館員に念を押してみないと本当に求める図書がないかどうかは判らない。

そして最も引きづらいのはやはりオンライン目録の「その3」。これに対する利用者の態度は、最初のDのように考えて疎んじる古風な態

度と逆にEのように過信する今時の態度との両極端に分かれるのであるが、どちらも間違っている。

キーボードは見るのもいやという昔気質の方には気の毒だがごく新しい受入図書は既にカード目録を作ることをやめてしまっているのです、どうしてもこれに立ち向かっていただかなくてはならない場合がある。すぐに動かなくなるし備え付けのマニュアルは説明が不親切なので近づきたくないのも無理はないけれど、機械音痴のわたしでもしばらく適当にいじっていたら何とかあったので、気楽に触れてみることをおすすめしたい。動かなくなった時は「リセット」又は「取消」のボタンを押すのがコツのようである。

しかしこのオンライン目録はその華麗な外見のゆえにか、これさえ検索しておれば図書館のことは全て判るのであってカード目録のような旧時代の遺物をかえりみる必要はもはやないのだ、という印象を若い学生に与えているふしがなくもない。それは誤解であり、オンラインのデータは今なお発展途上というか未完成のものなのでカードを引かねば見つからない図書もまだまだ多いのである。それに何しろ機械のことで、「島田」を探せと命じた時に「鳴田」を見過ごすなどと融通のきかない点もある。いずれ将来的にはそれらの未熟も克服されようがとりあえず現時点では、カードとオンラインの両方に当たる必要が常にある。それは確かに煩雑なことであるけれども、しかし四方八方検索しているうちに意外な資料を発見するということも時にはあったりするので、なじんでみればこの三国志のような目録の鼎立状態もそれなりに味のあるものなのではないかとわたしはひそかに感じている。

3 あの本を買え

以上に述べたことは、図書館のどこかにある文献をいかにして見つけ出すか、という問題である。言うまでもなくそもそも求めている文献

が図書館に所蔵されていなければいくら分類や目録が整備されてもそれはあだ花でしかないのです、実は図書館にとって最も重要なのがそこにあるどのような文献を揃えているかという点であるのは当然だ。だがしかし、分類や目録の扱い方がそれなりに利用者に知られているのとは裏腹に、図書館の購入図書がどのように選ばれ決められているのか、その過程や基準のごときものは杳として知られていない。職員のはしくれであるわたしもそのあたりはよく知らなかったもので、これも上司に尋ねてみた。その概要は次のとおりである。

まずその過程であるが、最初に取次の新刊書リストに基づいて図書館職員で構成される選書委員会が購入の原案を作成する。それに各学部の教授等が商議員として手を加え、そしていろいろ偉い人の承認を得て決定される。選書方針としては、高度に専門的な図書は各学部の図書室が備えるであろうから、附属図書館としてはむしろ基本的教養的古典的概説的学際的なものに力を入れる。そしてあまり廉価でないことを前提に、定評のある出版社のものや書評で取り上げられたものを選んだりある特定のテーマに関するものを集めたりするのであるが、しかし絶対的な原理原則があるわけではない、というよりその実態を一言で要約すれば、「金がないので本が買えない」ということのようなのである。

金がないのは薄々察していたことで、最近の『静脩』を読んでも、代々の館長が金策にかけずり回る御苦労が偲ばれる。自分が専攻する国文学関係で言うと、書棚で最近目につくのは寄贈書の相対的な多さである。現在刊行中のある近世文学の叢書などは、たまたま附属図書館の所蔵本を底本に採用した作品が収録されている巻は寄贈されて書棚にあるがそれ以外の巻は欠けていて、まことに半端な状態となっている。附属図書館は幸いなことに古典文学の原本などは豊かに所蔵しているので、それをもとにして出版された図書を出版社から寄贈してもらえるのはありがたいことである。だがそれは親

の遺産の利子で食いつなぐようなものであり、それに頼りすぎるのは健全でない。

全般に附属図書館は、こと新刊書に関してははなはだ手薄でほとんど期待できない、という感覚は今では多くの利用者に共有されている。何をどうしたら図書予算が増えるのか、それはわたしなどには全く判らないことであるけれども、右のような感覚が定着するのは附属図書館を愛する者としてとても残念だ。乏しい予算をやりくりする図書館内外の選書担当の方々の御尽力には敬意を払いつつ、それでもなお魅力的な蔵書を構成できるよう関係者の一層の御健闘を願わずにはいられない。

ところで学生の利用者は図書館の選書に何ら口を出すことができないのかということ、それはできるのである。「学生希望購入図書」という制度があって、図書館に置いてもらいたい本の書名や出版社等と自分の氏名等を用紙に記入し入口左の掲示板のところにある専用の箱に投函すればそれでよい。簡単なことなのだが、遠慮があるのかそれとも制度自体が知られていないのか、どうしても利用者が一部に偏りがちであるらしい。このような制度は広く薄く利用されることが理想的なので、なるべく多くの有権者の方に一度は清き一票を投じていただきたいものである。

予算の上でもこれは、決して潤沢ではないにせよ通常の購入予算と比較してあなどりがたいだけの額が別枠として用意されていて、自分のリクエストが通る確率はかなり高いとのことであるから、附属図書館の蔵書の充実のためにも是非大方の御協力を仰ぎたい。但しべらぼうに高い本、べらぼうに安い本、既に総合人間学部など学内の他のどこかの図書室に所蔵されているもの、絶版書や品切書、いくら何でも附属図書館には不要不適切なもの、などは没になる。また受入作業に数か月かかり、お急ぎの方には間に合わないのが大きな難点である。

4 またの会う日を

長く二股膏藥として附属図書館に貼りついてきたわたしもこの3月で京都大学を離れることとなった。そこで最後に、卒業等で同じように京大を離れる人達のために、また既に卒業した人達や今は在籍中の人達もいつかは卒業しようからその人達のためにも、卒業した後でもこの図書館を利用できる「卒業生利用証」について宣伝しておこう。

附属図書館は京都大学の卒業生専用の利用証を発行している。卒業証明書を持参して平日の昼間に来館していただければ手続きはすぐに済むのだがカード自体を作成するのに2週間ほどかかるので、それを取りにもう一度平日の昼間に来館していただく必要がある。この「平日の昼間」というのが御用繁多の社会人の方々には難関なのだが、しかし一度そこを乗り越えられればその後は夜間でも日曜日でも随時図書館を利用できるようになる。なお卒業生の場合、資料利用はすべて当日限りとなって1週間の貸出はできないなどいろいろ制約はあるが、とりあえず館内の資料を普通に閲覧することはまず一とおり可能である。

図書館の欠点ばかりをあげつらうような格好になってしまったが、附属図書館には附属図書館ならではの様々なよさがあるということは今更言うまでもないだろう。この図書館では多くのことを学ばせてもらったし何よりもここは居心地がよかった。ここで芽生えそして実った恋をわたしはいくつか知っている。それはどうでもよいけれど、とにかくこれからも附属図書館の資料とサービスとが一層充実し、一層有意義に利用される貧しくてもすばらしい図書館になることを心から願っている。今後は一介の卒業生利用者としてそれを見守ってゆきたい。